

氏名・(本籍) 濱口 雅行 (大阪府)

学位の種類 博士 (体育学)

報告番号 乙 第51号

学位授与年月日 2015 (平成27) 年 3 月19日

学位授与の要件 学位規則 (昭和28年 4 月 1 日 文部省令第 9 号)

第 4 条第 2 項該当

論文題目 剣道における残心の特徴に関する研究

審査委員 (主査) 北 川 薫

山 田 憲 政

荒 牧 勇

## 論文審査及び最終試験の結果

### 1. 論文審査の結果

#### (1) 提出論文の審査

本論文の構成及び内容の概要は次の通りである。

##### 1) 構成

第 1 章 序論

第 2 章 瞬目から見た残心の特徴

第 3 章 瞬目と脳波から見た残心の特徴

第 4 章 総括

##### 2) 内容の概要

剣道の勝敗の判定は、打突を有効と審判員が認めることによりなされる。この有効打突とは、全日本剣道連盟による試合・審判規則の中で定められている。中でも残心は、打突後に必要とされる要件であり、競技者が打突後も相手に対して持続して注意を怠らない状態を意味する。

序論において、この残心について、打突後であるにも係わらず、剣道が西欧の剣術競技と異なり、判定基準の一つとして「残心」という、いわば精神的な要因を有効打突の一つとしているのは、日本の剣道がもつ大きな特徴であると言える、としている。そして、この客観性の低い「残心がある」と審判員が判定する要件の元となる生理的事実を明らかにすること、を本研究の目的とし、さらに、その目的を遂行する

ために、次に示した二つの実験的研究を行っている。これらは、日頃の残心における瞬目抑制の訓練による般化の有無、すなわち、剣道における残心の特徴を注意集中の維持という観点から明らかにするという独自の視点にたったの実験的研究である。

第1の研究「瞬目から見た残心の特徴」は以下のとおりである。

被験者は、現在剣道部に所属する大学生18名（以下、剣道群）とし、同様に弓道部又はアーチェリー一部に所属している大学生計18名（以下、非剣道群）とした。実験には、刺激弁別課題である Go-NoGo 課題を用いた。測定は、まず3分間の安静記録を測定し、次いで3分間の実験を行った。各実験では、Go 試行・NoGo 試行はそれぞれ130試行となり、すべてを合わせると計260試行であった。

瞬目発生については、第1刺激 S1 呈示後の0-1000ms を区間 A、第2刺激 S2 呈示後の0-1000ms を区間 B、S2 後の1000-2000ms を区間 C の3区間に分けて分析の対象とし、それぞれ「予告瞬目率」、「早発率」、「遅発率」とした。さらに各部内の競技における実力を競技力とし、瞬目との関係を見ている。

その結果、課題表示である Go と NoGo にかかわらず、S2 呈示後の1000-2000ms の遅い区間において、剣道群は非剣道群に比べて最初の瞬目が多く発生していた。さらに、剣道群内においても競技力の高い者ほど課題表示後の最初の瞬目発生が遅い区間において多く見られた。以上のことから、課題後の瞬目抑制が剣道経験者における注意集中の特徴であると考えている。

これらの結果より、剣道群に見られた課題終了後における瞬目抑制の継続は、日頃の打突後における注意の継続という訓練が、本実験においても般化の影響が及んでいると推察できる。すなわち、「残心」と称される剣道経験者における注意集中の特徴の一端を、瞬目を指標として明らかにできたもの、と考えている。

第2の研究「瞬目と脳波から見た残心の特徴」の内容は以下のとおりである。

被験者は、剣道群と非剣道群の2群とし、随伴陰性変動（Contingent negative variation, 以下 CNV）を指標とした刺激弁別課題である Go-NoGo 課題を実施した。測定は、S2 呈示後の CNV 解消時間および初発瞬目の発生時間を測定した。

その結果、CNV 解消時間は Go 課題において非剣道群より剣道群の方が長かった。また、初発瞬目発生時間は、非剣道群より剣道群の方が長かった。さらに、S2 呈示後における CNV 解消時間と初発瞬目発生時間について有意な正の関数がみられた。これらの結果は、Go 課題終了後に対しても注意が長く保たれた結果だと考えられ、剣道経験の長い選手における残心の習慣が、剣道以外の一般課題にも般化していると推察している。

上記2つの実験的研究結果を包括的に検討し、剣道経験者における「残心」の特徴の一端を、CNV 解消時間と初発瞬目発生時間の視点から明らかにできたと考え、同時に、剣道経験者における心の鍛錬の具体的方法の一つとして、瞬目抑制に対する意識の介在が窺い知れた、と結論付けている。

### 3) 本委員会の評価

本研究が明らかにした知見は、専門領域の学術誌に原著として掲載されるほどに価値のある内容である。著者の長年にわたる剣道家として、また指導者としての経験が本研究の基盤にある。得られた結果は、これまで主観的、と言われてきた剣道の判定基準を客観化する一つの手がかりとなると考えられる。今後、研究の継続により「道」と言われ精神面が強調される領域において客観的な基準が提示されるようになるのではなかろうか。新しい研究分野の展開を予感させる優れた論文である。

以上より、本学位審査委員会は、本論文を体育・スポーツ学分野での博士学位論文として適格である、

との結論に達した。

## (2) 提出論文と既刊論文との関係

本論文を構成する各章は下記の学術誌に掲載された論文に基づいて書かれている。

- ① 濱口雅行, 浅田 博, 北川 薫 (2012)  
瞬目に見る剣道経験者における注意集中の特徴.  
体育学研究 57: 119-127. (第2章を構成)
- ② HAMAGUCHI, M., ASADA, H., ARAMAKI, Y., KITAGAWA, K. (2014)  
Characteristics of Zanshin of Kendo Practitioners : Examination of the Relationship  
between Eye Blinking and CNV Resolution Time. International Journal of Sport and  
Health Science 12: 53-60. (第3章を構成)

## 2. 最終試験の結果

本論文の内容に関して2015年1月7日に口述試験と英語の学力試験を実施した。口述試験での主な質疑は、第2回審査委員会での指摘に沿ったものであった。すなわち、学位論文中、専門領域に関わる記述の説明の不足、あるいは字句や得られた結果の解釈と表現などの不明確さについての指摘であり、根幹にかかわるような問題点の指摘はなかった。これらの質疑に対して、その見解及び研究能力を確認するものであった。

その結果、十分な学識と研究能力を持つことが確認され、さらには現場指導者としての体験に基づいての研究であることが改めて理解できた。

## 3. 学力の確認

本研究科の指導指針にのっとり、学会誌に原著論文筆頭著者として複数の論文が掲載されており、その一編は英文での論文であること、および本年度の体育学研究博士後期課程に用いた同じ英文解釈の試験を課したところ課程入学者に遜色のない成績であった。

## 4. 結論

本学位審査委員会は、提出された博士学位請求論文が博士の学位を授与されるに値するものであり、かつ論文提出者はその専門分野における十分な学識と研究能力を持つ者であることを確認したので、博士(体育学)の学位を授与するのにふさわしいと判断した。

以上